

忘れられた パンデミック

スペイン・インフルエンザ

▶ 上

およそ100年前、人類は史上最悪といわれる感染症。パンデミックを経験した。『スペイン風邪』とも呼ばれた新型インフルエンザだ。世界人口の3分の1から半数近くが感染。死者は5000万〜8000万人、最大で1億人という説もある。この「ウイルスと世界大戦」の歴史は、いま猛威を振るう新型コロナウイルスに對処するにあたり、多くの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

それは1918年3月、米国カンザス州の陸軍基地で始まった。インフルエンザの症状を訴える兵士が続出。「3月だけで2333名

出征軍から世界拡散

100年前 死者最大1億人



大部屋に並んだベッドで治療を受けるインフルエンザ患者 (1918年、米オークランド) =AP

の肺炎患者が出、うち48名が死亡していた」(アルフレッド・W・クロスビー「史上最大のインフルエンザ」)。だが、この出来事は特段注目されることにはなかった。

さなか。米国から毎月数十万人の兵士が欧州に渡っており、感染者を含む軍隊は「ウイルスの運び屋」となった。大人数が密集する兵員輸送船、塹壕(ざんこう)や兵舎は格好のウイルス培養の場となり、5月ごろから西部戦線、夏には欧州全域で感染が広がった。

感染はアジア、アフリカ、南半球に飛び火し、秋以降に世界的なパンデミックとなる。第2波である。軽症者の多かった第1波より格段に致死率が高かった。病性多くは重症にして殊(こ)とに肺炎等の合併症多く、又(また)時に電撃性なるあり(内務省衛生局編「流行性感冒」)。健康な人が発症12時間以内に死亡するケースが多数報告された。

米国では工場労働者が大量欠勤し、医療関係、警察、鉄道などでも感染が広がり、公共サービスが低下したが、1919年初頭から

た。病院は満杯になり、各地で棺おけが足りなくなつた。

欧州戦線では対峙していた全兵士の半数以上が感染。「軍隊にありては其(そ)の戦闘力の殆(ほとん)ど四分の一を失ひたるものあり」(同)という惨状で、米軍では大戦で戦死した約10万人の半数近くがインフルエンザによる病死だった。

大戦の総戦死者の6割(約1000万人)が戦病死で、その3分の1がインフルエンザが原因とされており、戦争の終結を早めたといわれている。交戦国は感染爆発を秘匿し、中立国のスペインに関する報道が先行したため、「スペイン・インフルエンザ(日本では一部新聞が風邪と表記)」と呼ばれた。

第2波は12月には収束したが、1919年初頭から春にかけて第3波が襲いかかり、世界をなめ尽くした。各地の死者は欧州で230万人、インド1850万人、米国68万人、アフリカ238万人、中国400万〜950万人、日本39万〜45万人といわれている。「人類史上これまでに大発生したいかなる病気よりも多くの人々を死に至らしめた」(ジョン・バリー「グレート・インフルエンザ」)。

高齢者よりも18歳から30歳代後半までの若年、壮年の犠牲者が多いのが特徴だった。著名人ではドイツの社会学者ウェーバー、フランスの詩人アポリネール、オーストリアの画家クリムトらが命を落とした。

パンデミックは翌20年まで続いたが、感染者数と致死率は格段に縮小し、季節性のインフルエンザとなった。当時はウイルスを抑え込む特效薬もワクチンもなく、終息は多くの人が一定程度の免疫を獲得したためともいわれているが、確かなことはよく分かっていない。

(編集委員 井上亮)